

[016]言語文化叢書 : 国際化時代の大学英語教育 :  
現状の足梯と新たな可能性 : 表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4771877>

---

出版情報 : 言語文化叢書. 16, 2005-03-18. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 序 文

井上奈良彦

大学英語教育は転機にきている、と言われて久しい。そう言われつつ、なかなか変化していない。大きく変化した大学もあれば、あまり変わっていない大学もある。その中で、九州大学は保守的な部類に入るといいだろう。その九州大学の英語教育にメスを入れ、日本の大学英語教育の改革の可能性を探るのが本書の目的である。

キーワードは英語教育とディベートである。国際化時代の道具として注目されて久しいが、単なるコミュニケーションの道具としてだけでなく、個人個人の自己実現の手段としても注目したい。また、そこには共通するパラドックスも潜んでいる。世界共通語としての英語は、その利便性を強調される一方、「英語帝国主義」などの名のもとに、その傲慢さが批判の対象になってきた。しかし、その問題を世界に向けて問いただすには英語を使わなければならないという現実がある。ディベートという意味決定・コミュニケーションの手段も多分に西欧的なものとして、日本を含めた世界各地で土着の意味決定・コミュニケーションの手段と必ずしも相容れないものである。世界で通用するためという理由から、土着の方法を捨ててしまうのは問題である。一方、様々な国際的な交渉の場において、多くの知識や価値観を共有することを前提としたコミュニケーションの方法は、コミュニケーション・ギャップを生じやすい。また、そのような場に出てくる交渉相手は英米（また広く西欧）で教育を受けたり、英米（西欧）の教育制度や方法を採用した現地教育機関を卒業した「エリート」であることが多い。そこで対応するには、ディベートのようなコミュニケーション方法も使える人材が求められる。結局、母語と世界共通語を切り替えて使える人材、土着のコミュニケーション方法と世界で通用するコミュニケーション方法を切り替えて使える人材、が求められるのである。さらに、それらを単に道具として使うという視点だけでは不十分である。特にそれらを教育・研究する者は、道具の持つ危険性にも目を向けたい。

「先進」工業国として台頭した日本は、いまや援助大国としての役割も期待され、使命を果たしつつある。また、経済活動のボーダレス化は既に当然のこととなり、政治、学術、その他の国際交流もますます盛んになるだろう。日本人がそれらの場で外に出て行くとともに、日本に外から受け入れる外国人——異なる言語や文化を担った人々も短期・長期に関わらず増加する。そのような状況で英語と世界に通用するコミュニケーション手段は三つのレベルで重要である。日本人が活動するために必要な道具として重要なことは広く認識されている。次に、そのような道具は社会開発援助の一環として、差別を受けたり貧困に苦しむ人たちの糧となる。より良い生活を手に入れるための個人的手段として、また、そのような人たちのコミュニティが発展するための共有資源として利用できるように手助けする必要があるだろう——母語や土着の方法に取って代わるのではなく追加して利用できるようにである。さらに、日本国内にも目を向けたい。民族、国籍、性別、出自などによる差別やさまざまな権力構造による抑圧はいっこうになくならない。日本人はいわゆる開発途上国に出向いて社会開発に貢献する前に、国内の問題に目を向け社会開発が必要なのではないだろうか。「日本語」という呪縛、伝統的なコミュニケーション手段という呪縛を解き放つ手段として、外国

語としての英語習得やディベートのような意思決定・コミュニケーションの手段は注目に値する。もちろん万能薬のように考えてはならない。追加して利用できる資源としてである。

本書は三部構成になっている。第1部は、九州大学の現状のカリキュラム分析と提言を、Web上に公開されている膨大なシラバス資料に基づいて行ったものである。根本的な問題は、体系的なカリキュラムの欠如であり、さらに、公式のカリキュラムは有っても、それはあくまで、形式、建前という現実がある。実際は教員の自由裁量に任されている部分が多い。少なくとも今まではそうであった。また、その実際に行われている「カリキュラム」やシラバス（具体的な授業計画）に対する評価も見過ごされている。そこに、鋭くメスを入れた、著者の九州大学卒業生としての熱い思いが感じられる労作である。さらに、ここで得られた多くの知見は九州大学にとどまらず、日本の多くの大学に程度の差はあれ当てはまるものである。

第2部では、大学の英語教育担当部門の中で何が起きているのかを、一教員の立場から論じた。特に現在進行形のカリキュラム改革に関わる筆者が、これまで日本の大学英語教育に対して感じてきた「何かおかしい」というものを、ある程度大胆な推測（しかし、経験や資料に基づく推測）を含めて提示した。文部科学省在外研究員としてハワイ大学に滞在中に英語で口頭発表したものを、ほぼそのまま収録している。あくまでも個人の見解だが、発表後、他の日本の大学から来ていた教員にも大いになぜかかれた内容であった。内容は第1部と対応する部分もかなりあるので、読み比べていただくといいだろう。

第3部では、学生時代から国内外において「ディベーター」として活躍してきた著者が、自ら実践してきたパラメンタリー・ディベートという英語ディベートの一形式について、歴史をたどり、参加者の意識を調査し、異文化間教育の中に位置づけたものである。日本では引用資料や準備書面にに基づく議論を重視するアメリカ系のいわゆるアカデミック・ディベートが盛んであるが、近年、大学英語クラブ（ESS）の間では、即興の議論を重視する英国系のパラメンタリー・ディベートが急速に人気を得ている。世界的にはこちらが広く普及している。スポーツに喩えると、アメリカや日本でフットボールと言えば、防具をつけて攻守交替する「アメリカン・フットボール」であるが、世界的には、泥まみれになって攻守入り乱れるアソシエーション・フットボール（サッカー）やラグビー・フットボールである。

本書が九州大学に限らず日本の大学英語教育についての理解と今後の改革に少しでも役立てればと思っている。

第1部と第3部はそれぞれの著者の修士論文（九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻）に基づく。二人とも井上が他の指導教員とともにその内容について助言してきた。本書の内容は、今回の言語文化研究叢書としての刊行にともない、それぞれの部分の著者が改訂を行い、井上が全体を通して編集した。ただし、大学の英語教育も学生のディベート活動も今、刻々と変化しているので、本書の刊行時には既に古くなってしまった情報もあることをお断りしておく。なお、参照文献と付録資料は各部の末尾につけた。